

箱庭療法における「枠」の意味について

— 枠強調箱庭と枠なし箱庭を用いて —

学校教育専攻
教育臨床コース
松堂まどか

指導教員 山下一夫

(1) 問題と目的

箱庭療法における「枠」の問題は、心理臨床場面における治療構造という「枠」や遊戯療法における「制限」、また箱庭療法から派生した描画における「枠づけ」の問題とさまざまな広がりを見せ、なおかつ重要な問題である。本研究においては、「保護」と「制限」という両価的な機能をもった、二面的な存在である箱庭の枠に焦点を当て、箱庭療法において制作者が三重目の枠—すなわち砂箱の内側に柵などを用いて作られた枠—を作るときにはどのような心理が作用しているのか、また、制作者が三重目の枠を作る意味を明らかにしていくことを目的とする。

(2) 方法

3種類の箱庭 a. 通常の砂箱 (57×72×7 cm) を用いての箱庭制作 (以下、通常の箱庭) と、b. 制作者自ら枠を置いた上で制作する箱庭 (以下、枠強調箱庭)、c. 通常の砂箱より高さを4cm低くした砂箱 (57×72×3 cm) での箱庭制作 (以下、枠なし箱庭) を各1回計3回実施する。

質問 箱庭制作後の気分状態について問うた質問紙によって通常の箱庭、枠強調箱庭、枠なし箱庭で気分状態どのように変化するのか検討する。また、箱庭制作後に得られたインタビューの内容から、特に枠強調箱庭、枠なし箱庭で語られるストーリーやテーマに

違いは見られるか検討し枠の視点から考察を試みる。

被験者 臨床心理学を学ぶ大学院生男女18名と臨床心理学専攻でない大学生女子6名を対象に箱庭制作を実施した。なお、大学院生に関しては箱庭制作の経験が最低1回以上ある者とし、大学生に関しては箱庭制作の経験がなく、かつ臨床心理学やカウンセリングの授業を履修していない者とした。また、箱庭制作の順番による影響に配慮し、被験者を6グループに分けた。

実施時期 実施期間は、2006年8月下旬から同年の10月初旬までであり、原則週1回1時間を目安とした。

教示 使用した部屋には普通の砂と白い砂が用意されているため、3回の箱庭制作を通じて被験者に今回使用する砂箱を教示の前に選んでもらうようにした。通常の箱庭 (a) と枠なし箱庭 (c) については「この砂と玩具を使って何でもいいので作ってみて下さい」とした。枠強調箱庭 (b) については、筆者が実際にビー玉と花の玩具を用い、砂箱に沿って枠を作って見せ、枠は何の玩具を使って作っても良いこと、枠の形や大きさ、玩具と玩具の間隔は自由であること、枠を作った上で箱庭制作をすることを伝え、教示とした。

調査内容 筆者の教示の後、被験者が箱庭制作を実施し、その後制作された箱庭を被験

と筆者の2人で眺めながら、10分程度のインタビューを行った。インタビューの後、被験者には「箱庭制作後にどう感じているか」とし、10項目5件法(1~5点)の質問紙を実施した。

(3) 結果

箱庭制作後に実施した質問紙については、箱庭制作後に感じる気分状態に a (通常の箱庭)・b (枠強調箱庭)・c (枠なし箱庭) 間で大きな差は見られなかった。また項目内で平均得点の比較を行った。その結果、④「強いられる感じだ」では、a (通常の箱庭) が b (枠強調箱庭)・c (枠なし箱庭) に比べて平均得点 1.5 ($SD=0.88$) で低い。⑤「守られる感じだ」では平均得点 2.8 ($SD=0.90$)、⑦「悩みが解消された感じだ」では平均得点 2.5 ($SD=0.83$)、⑩「高揚した感じだ」では平均得点 2.6 ($SD=0.93$) となっており、いずれも c (枠なし箱庭) が a (通常の箱庭)・b (枠強調箱庭) に比べて低い平均得点となった。しかし、t検定を行ったところ、どの項目についても有意差は見られなかった。

また、24名それぞれについて事例研究を行った。その結果、枠強調箱庭については、枠に対する感じ方や表現されたテーマ・ストーリーともに「守り」ということが多く語られた。枠なし箱庭の枠については「保護」「制限」以外の枠の機能として「開放」が新たに示された。

しかしその一方で、枠がないことへの不安を語る被験者もいた。このような被験者は、砂箱の内側に沿って木などを配置し枠をつけたり、トーテムポールや大仏などの宗教的象徴を用いることで、「守り」を表現していたようであった。また、学年による違いとして、

M1 の箱庭には泉や池や海が表現される傾向が強く、M2 についてはそれらの表現は少ない傾向にあった。

(4) 考察

枠強調箱庭において、「守り」といったことが多く語られた背景には、被験者が Erikson, E.H. (1959) の発達課題である同一性対同一性の拡散ということが関係していると考えられる。家族のもとを離れ、真に社会的な存在へと脱皮する過程において、不安はいつも付きまとうものである。それゆえその過程において生じる不安から自分を守るといった意味においても、「守り」といったことが多く語られたのではないだろうか。

宗教的象徴は親の心理的な支えが期待できないとき、個人の心の支えとして現れ、子どもは自分の中の宗教性を頼りに自立を図っていると思われる(西村・2001)。枠なし箱庭において宗教的象徴を「守り」として表現した背後には、被験者の年代も考慮に入れれば、より積極的な自立を意味しているのではないだろうか。また、枠について「保護」「制限」以外にも新たに「開放」という機能が示されたことは意義深かったのではないだろうか。

M1 において泉や池、海などの無意識の世界を象徴するものが比較的多く表現された背景には、これから自分の内界に入っていくということが示されていると考えられる。

また、M2 についてはそれらの表現が少なかった。これは、M1 と比べて自分の内界というよりも、就職などの外界とのコミュニケーションを目前にして、その外界に向かう所での混乱や戸惑いといったことが関係していると考えられる。